

最初の「雨だれ」の前奏曲、広大なツクリ。雨だれの情景、穏やか安らぎ、大きな心。雨滴だけのトリミングや雨音の強調刷り込みでなく、深い懐の中。ドラマチックな一幅の絵、24枚の15枚目という捉え方ではない。アンコールの演奏曲「別れの曲」も然り、オーソドックスな締め座り、サンゾン・フランソワさんのエキセントリックな無手勝流は心にとどめ。

「マズルカ3曲」、いつもと違った緊張感、この舞曲初めての試み。力強いリズム鼓動、編み上げ靴のステップ。短い曲々、あたかも体言止めのものも、アンコール・ピースとは違う収まり、別呼吸で浸る楽しみに満ちて。この作曲家他の作品の延長線上の演奏、力強くオドロオドロシク、あるいは切れ良くスパッ。別言語や異次元へのトリップでなく、隣町への散歩。自信を持つての幅広げ、慎重な分だけコンマ単位の遅さ。「ワルツ2曲」、憂鬱気なスパイスの香り、すべて飾らず自然のままという訳にも、というメッセージ。

楽器そのものやホールの響きによって、臨機応変に演奏を変える、いつしかのピアニストのトークで聞いたよう。ここのホールのベヒシュタイン、レスポンスが良すぎて、コントロールのしずらさ。弾き慣れた「舟歌」も、初めての試みになるのかしら。アンコールの「ワルツ1番」、聴衆のくつろぎティータイム、緊張感からの解放。演奏家も心軽やかリラックス、ナチュラルなノリ。

身近に聴衆の感情と表情、感動も戸惑いも、直(じか)の反応。アットホーム的、孤独感でなく連帯が先に立つ、ステージでのリサイタルと異なる感覚。マイク・パフォーマンスのプラスアルファ、わかりやすい作品の説明。このシチュエーションに、たびたびのチャレンジ、プレゼンテーションの一つと位置付けし、楽しんでいる様なピアニスト。今まで得てきた、音楽の喜びを伝える絶好の機会と捉え、自分の子供に話す様に丁寧に優しく。(2010.10.23)

ショパン：前奏曲 変ニ長調 Op.28-15「雨だれ」
 ショパン：舟歌 嬰ヘ長調 Op.60
 ショパン：幻想即興曲 嬰ハ短調 Op.66
 ショパン：ノックターン 1番 変ロ短調 Op.9-1
 ショパン：スケルツォ 2番 変ロ短調 Op.31
 ショパン：ワルツ 7番 嬰ハ短調 Op.64-2、14番 ホ短調 Op.poth
 ショパン：マズルカ 15番 ハ長調 Op.24-2 17番 変ロ短調 Op.24-4
 40番 ヘ短調 Op.63-2
 ショパン：ポロネーズ 6番 変イ長調 Op.53「英雄」
 (アンコール)>
 ショパン：ワルツ 1番 変ホ長調 Op.18「華麗なる大円舞曲」
 ショパン：ワルツ 6番 変ニ長調 Op.64-1「小犬」
 ショパン：ノックターン 20番 嬰ハ短調 Op.poth
 ショパン：練習曲 3番 ホ長調 Op.10-3「別れの曲」
